

プロローグ

俺が異世界に転移し、フローラ・オルレアンを抱いてから半年後。

すっかりこのオルレアン帝国での生活にも慣れた。正妻である皇后のフローラをはじめ、側室や妾めかけとの子作りも順調だし。

それは目の前の光景にも表れている。

俺の自室に、三人の妊婦がいた。

俺の子を孕はらんだ少女たちだ。メイド服のアイリスとクラリスの姉妹、それにドレス姿の皇女エリカだ。

三人とも服の上からお腹の膨らみがわかるようになってきた。

二十歳になったメイドのアイリスは妊娠六ヶ月、その妹の十六歳のクラリスは妊娠五ヶ月、十五歳の皇女エリカも妊娠五ヶ月だからだ。

もちろん、みんな俺の子だ。

アイリスは期待するように、クラリスは不安そうに、エリカは不機嫌そうに俺を見つめる。

アイリスは、ふふつと笑う。

「カズキ様、今夜は私たちを可愛がっていただけなのですよね？」

「もちろん。そのために呼んだんだから」

「妊娠がわかってから、あまり抱いていただけなくなりましたものですか……」

たしかに妊娠がわかった子はそれほどたくさん抱くわけにもいかない。なるべく多く、皇帝の子を作る必要があるからだ。

特にアイリスは本来なら性欲処理道具にすぎない妾の立場だから、なおさら、だが……。

「いや、アイリスは三日に一度は呼んでいるよね？」

俺は思わず言ってしまう。アイリスはこの世界に来て、俺が一番初めに抱いた女の子だ。特別思い入れもあるし、相性もいい。

フローラの次に寵愛しているのも彼女だ。だからこそ、けつこうな頻度で子作りをしている。まあ、妊娠済みだから子供は仕込めないわけだけれど。

ところが、フローラ以外の二人はそのことにショックを受けた様子だった。クラリスは悲しそうな顔になり、エリカは怒った表情になる。

クラリスがおおずと口を開く。

「わたしのことはそんなにたくさん呼んでくださらないですよね」

「えっ、そ、それは……」

エリカが横から言う。

「私だって最後に抱いてもらったの先週なんだけど!？」

「いや、決して二人を後回しにしているわけじゃなくてね……お腹の子にも差し障りさわがあると

いけないし」

「それはアイリスだつて一緒にでしょ？」

まあ、それはそうだ。我慢できずにアイリスのことは抱いてしまっているだけで。

アイリスは得意そうな笑みを浮かべる。

「ふふっ。私がフローラ様の次にカズキ様に愛されているのですから、当然ですよね」

「め、妾のくせに……！」

「エリカ殿下は、私と張り合う前にリディア様に勝つことを考えたほうがいいのでは？」

皇女エリカと伯爵令嬢リディアは、どちらも俺の側室だ。妾より一段上で、年齢も十五歳と十三歳と二つ違い。

ただ、最近はリディアの方を呼ぶことが多いのも事実だ。

リディアは呪いのせいで妊娠できないので、かえって抱きやすい。今もロリっ子らしい身体つきを維持している。

反面、エリカは妊娠してからかなり胸も大きくなって、身体つきも大人びている。十五歳の少女とは思えないほど、魅力的ではあるのだけれど、やっぱり妊娠中だと思ふとあまり無理はできないから、多くは呼んでいないのだ。

それにリディアの方が性格的にも素直だし。

エリカは悔しそうにアイリスを睨む。

「め、メイドのくせに生意気よ！ こ、このおま〇がカズキをたぶらかしたわけ？」

そう言うのと、エリカはアイリスのメイド服のスカートをめくる。もともとかなり短い丈だから、簡単に下着が見えてしまう。黒い扇情的なショーツが目眩しい。

「きゃっ」

アイリスは可愛らしい悲鳴を上げて、慌ててスカートの裾を押さえる。

俺は、くすりと笑う。

「恥ずかしがるのは、いまさらじゃない？ 俺に何十回も抱かれて、妊娠もしているんだし」

「それでも恥ずかしいんです。お腹も大きくなっていますし……きゃっ」

今度は、えいっと上半身をエリカがめくる。

直に見ると、より大きく膨らんだお腹がはつきりとわかる。

アイリスが俺の子を孕んでいることを示しているわけだ。

「男の子でしょうか、女の子でしょうか」

「それ、前も言っていたよね。そんなに気になる？」

「はい。だって、女の子だったら、カズキさんを巡るライバルになっちゃいそうで……」

さすがに俺も実の娘に手を出したりはしないけれど。

ただ、女の子だったら可愛いだろうな、とも思う。もし男の子だったら、後継者の面で多少考えないといけない。

現状、俺の正妻のフローラはまだ妊娠できていない。俺は何度もフローラと子作りして、その子宮に子種を注いでいるのだけれど……。

フロラも焦っているみたいだ。

もしフロラがこのまま妊娠できない、あるいは妊娠できてもだいぶ先なら、アイリスやクラリス、それにエリカ、密かに妊娠させられたユノたちの子供が後継者候補になるかもしれないわけで。

そうなると後継者争いみたいなことにもなりかねない。

考えないといけないことは多い。

俺はさまざまな考えを脳裏から振り払った。

今はアイリスたちを寵愛することだけを考えよう。

それが彼女たちの望みなのだから。

相変わらず喧嘩をしているアイリスとエリカを横目に、クラリスがひざまずき俺のズボンを脱がし始める。

「忘れないでください。わたしも陛下のおち○ちんが欲しいんです……」

「すっかりクラリスも淫乱になったね」

「言わないで……ください。二人目の子供も絶対……あつ」

ぼろんと出た俺の肉棒を、クラリスは恥ずかしそうに見つめた。

けれど、クラリスはすぐに俺のものをくわえ、口と手を前後させて刺激する。

アイリスとエリカも慌てた様子で、「抜け駆け禁止!」と俺の前にひざまずいて、ペニスを舐め始める。



「ちゅぶつ」「れろつ、んんつ」「……きやつ」

三人の女子に争うように刺激され、俺のものはすぐに大きくなり、そして彼女たちの顔へと精を放った。

顔も服も汚れてしまうが、アイリスもクラリスもエリカも気にした様子はない。

むしろ別のことに不満のようだった。エリカはジト目で俺を見る。

「ちゃんと我慢してよね？　ここに注いでくれないと意味ないでしょ？」

エリカは恥ずかしそうに秘所を自分で広げて見せる。もう妊娠しているから子作りを意識する必要はないのだが、それでも彼女たちは俺の子種をねだった。

明日はリディア、護衛の女兵士ユリア、それにフローラの三人を呼ぼうか。三人とも妊娠していないから今日とは対照的だ。

ところが、そう呑気な^{のんき}ことばかりも言つてられなくなった。

第一話 プライド高い公爵令嬢と子作り

俺は皇帝とはいえ、皇后であるフローラに政治を任せている。もともと政治はフローラが取り仕切るという約束だった。

他国の王子や貴族と違って、政治に無用な口出しをしないところも、俺がフローラの配偶者選ばれた理由だろう。

とはいえ、オルレアン帝国の現状は厳しい。先代皇帝が死んだ戦争のせいで、国はかなり傾いている。

貴族で帝国政府の命令を聞かない家も多い。それに、戦争で大量に死んだせいで男性が不足している。

俺が求められているのは、女性の相手が極端に足りないという理由もある。一方で、貧しい女性^ちは拉致^ちされて、帝国内外へと違法に人身売買が行われている。

そんな帝国の舵取りをフローラはしないと決めた。そのせいで、最近は忙しすぎて俺との子作りができないのも、フローラが妊娠できている理由ではないかと思っていた。

もし彼女が困っているなら、俺は力になりたい。一部でも政治を任せてもらおうとか。自慢じゃないが、俺は元の世界ではそれなりに仕事ができるほうでもあった。

そして、彼女の役に立つ機会は意外にもすぐやってきた。

三人の妊婦の相手をした翌日の午前十時。俺はフローラから呼び出されていた。場所は皇帝執務室。皇帝執務室といっても、使っているのはほとんどフローラで、彼女が大臣たちを集めて会議をするから、かなり広い部屋でもある。

まあ、この部屋でもエッチしたことはあるんだけど……。

フローラと俺の席は会議席の一番奥。その背後には白百合の紋章旗が掲げられている。

十二人の大臣も全員揃い、円卓に腰掛けていた。アイリスが紅茶を給仕している。

この大臣会議にも俺はあまり参加したことがない。こういう場に出ると俺は皇帝で、フローラは皇族であり、国の統治者なのだと実感する。

もつとも、大臣のほとんども名門貴族の若い女性だったりする。男性大臣は全員、戦場で殺されるか、暗殺されるかしているからだ。

今回は何か俺にも関係する議題があるようだ。

宮内大臣のステラ・シャンパーニュが紅茶を飲み干すと、手を挙げた。ステラは二十六歳。シャンパーニュ公爵家の当主であり、オルレアン帝国七大貴族の一人だ。

長身のすらりとした姿に、短い黒髪と眼鏡。美人だけれど、いかにも有能そうで気位が高そうだ。それに、スーツを豪華にしたような、青い立派な文官服もよく似合っている。

実際、幼い頃から神童と呼ばれていたそうで、若いのに多大な功績を挙げている。

その服の上からでもわかる胸の膨らみを俺は眺めた。フローラと同じぐらいありそうだし……。「それではご報告させていただきます。先代皇后、つまり皇太后シルウィア陛下とその皇女ル

ナ殿下のご処遇についてです」

フローラは先代皇帝の長女だが、正妃の娘ではない。側室だったユノの娘だ。

先代の正式な皇后はシルウィア・オルレアンという。本人も皇族で先代皇帝の従妹の娘だそう。彼女には何人か娘がいるが、その中で最も年齢が上なのがルナ。

まだ十二歳の少女だ。

先代皇帝が戦死した後、遺言もなかったのでフローラとルナのどちらが後継者となるか、宮廷では議論になったらしい。長幼の順を重んじればフローラ、母の身分ではルナに軍配が上がる。

結局、聡明の誉れ高いフローラが、異世界から男を召喚し、結婚するということで問題は解決した。

はずだったのだが。

残ったルナとシルウィアは、カズキ&フローラ体制にとつて脅威になりかねない。皇位継承の正統性を主張して、たとえば外国の王子を配偶者として皇帝の座を狙うかもしれない。

そこで彼女たちの処遇は早めに決めてしまう必要があった。

ステラは言う。

「外国、たとえばスターリング連合王国の貴族とのご婚姻なども考えたのですが……」

フローラがうなずき、その言葉の続きを引き取った。

「スターリングがオルレアンに攻め込む口実になりかねないよね。他の大国でも同じ危険があ

るし、小国だとうちの国と釣り合わない」

なるほど。それで扱いに困っているわけだ。

俺は聞いてみる。

「かといって、国内に置いておくのも危険じゃないかな？」

フローラは、ふふつと笑う。

「カズキさんの言うとおり。そこで、とっておきの策を考えたいわけ。絶対にわたしたちの脅威にならない方法があるでしょう？」

「それってまさか……シルウィアさんもルナさんも俺の側室にすること!？」

俺の言葉に若い女性大臣たちは顔を赤くして、小さくうなずいた。

無表情なのはステラだけだ。

「二人だけではありません。シルウィア陛下にはまだお若い母上のレア様がいいます。お美しいですし、まだ子供を産むこともできるはずです。ルナ殿下には他にもライラ様をはじめとする妹君がいいますから」

レアは三十三歳、シルウィアは二十二歳、ルナは十二歳、ライラは十歳でさらに年少の妹もいる。シルウィアはアイリスとそう変わらない年齢なのに、十二歳の娘がいるわけだ。

つまり、レアは十歳でシルウィアを妊娠したようで、シルウィアも九歳でルナを妊娠した計算になる。どういう経緯かは知らない。ただ、ユノも十代前半でフローラやエリカを産んでいるし、これは異世界オルレアン風の風習なのだろう。また、レアとシルウィアは先代皇帝から同

時に寵愛を受けていたようで、先代皇帝とレアのあいだの娘もいるという。

ややこしすぎて頭が痛くなってきた。その全員を俺の側室にするという。

ステラは肩をすくめた。

「全員を皇帝陛下の側室として妊娠させてしまえば、反抗することもないでしょう。理由をつけて妾に堕としてもいいですし。とはいえ、現時点では二人の政治力も無視できません。側室となる件についてシルウィア陛下とルナ殿下のご意向を確認したもの、『検討はする』という言葉のみでした。問題がなかなか解決しない理由もここにありません」

どうやら二人は乗り気ではないらしい。それはそうだろう。本来なら手に入るはずだった権力の中枢から押し出されただけでも気分は良くないだろう。さらに、よく知らない皇帝に、フローラより一段下の側室として仕えることになるのだから。

前皇后とその娘ともなれば気位も高いはず。

けれどフローラは、くすくすと笑った。

「だからね、カズキさんにはシルウィアさんとルナちゃんを必ず側室にしてほしいの。説得してもいいし、無理やりでもいいよ」

「え!？」

「本当はね、カズキさんを巻き込みたくなかったんだけど……カズキさんには政治の義務は負わせないって約束したし。でも、あの二人をほうっておくわけにもいかないから」

そこで俺の力が必要ということらしい。

もちろん、フローラの頼みなら喜んで引き受ける。だけど、シルウィアたちを説得すること、無理やり十二歳の女の子のルナを手籠めにするのも、そう簡単に実行できることじゃない。俺がためらっていると、フローラは付け加える。

「シルウィアさんたちはわたしたちを畏にはめようとしているのかも」

「実際、不審な動きもあります」

ステラも補足する。つまり、シルウィアたちに政府転覆、あるいは俺やフローラに危害を加える意図がささやかれているらしい。

手段はわからないけれど、早めの解決策が必要だろう。

それに、シルウィアは絶世の美女だという。あの美しいユノと先代皇帝の寵愛を争い、勝利もしたのだから。その娘のルナも可憐な容姿の子のようだ。

二人を抱くことが国のため、フローラのためになる。それに美女や美少女に俺の子種を注げるなら、大歓迎だ。

「わかったよ、できる範囲で対応する」

「ありがとう、カズキさん」

フローラは優しく微笑んだ。

そして、机をぱんと軽く叩く。

「ここにいる大臣のみんなはわたしに忠誠を誓ってくれている。わたしはそう信じています。だから、これから国のために、そして皇帝陛下のために力を尽くすことを期待しています」

フローラが立ち上がると、俺も慌てて立ち上がる。合わせて、大臣全員が立ち上がった。

「神の恩寵によるオルレアン皇帝及び皇后、至高の尊厳者たるカズキ陛下、フローラ陛下万歳！」

大臣職の若い女性たち中心に甲高い声で唱和した。

こうして、俺は一つの課題を請け負うことになった。

会議が終わった後、全大臣が退出し、俺とフローラだけになる。

そのフローラは立ち上がり、俺に近づくと俺に抱きついた。

「おつかれさま、カズキさん♪」

「フローラさんこそおつかれさま。毎日大変だね」

俺がフローラの髪を撫でると、フローラは嬉しそうな顔をする。

甘えるようにフローラは俺に体重を預けた。

「カズキさんがいるから頑張れるのよ。子供ができないのだけが残念だけど」

それは一番の懸念だった。エリカやアイリス、クラリスと違って、なぜかフローラは妊娠しない。

医学的な理由があっても、この世界の医療技術では明らかにできないかもしれない。

それとも一つ。リディアが妊娠しないのと同じように、呪いの魔法が関係している可能性もある。

フローラが明るい表情で言う。

「でもね、わたしが妊娠しない理由がわかったかもしれないの」
フローラが話したのは予想外の内容だった。

☆

翌日。

オルレアン帝国の宮廷は内廷と外廷に分かれている。内廷は皇帝の俺とフローラたち皇后・側室・妾が過ごす私生活の場。アイリスがメイド長となり、内廷を取り仕切っているし、俺たちの身の世話をする女性以外は立ち入れない。

一方、外廷は公的な政治を行う場で、こちらは首席大臣のアメリ・ラプラスをはじめとする臣下も出入りする。内廷と外廷をあわせて管理するのが宮内大臣である、ステラ・シャンパーニュというわけだ。

今、俺は二人きりでステラといった。外廷にある宮内大臣の執務室。初めて入る。少し用事があつたのだ。

皇帝執務室よりは狭いが、立派な部屋だ。俺は来客用の長椅子に腰掛けると、ステラに「座っていいよ」と隣を指す。

俺は皇帝なので、彼女より先に椅子に座るし、命じなければ彼女も着席できない。

俺の右隣に座ることに、ステラは少し困惑した様子だった。が、やがて大人しく腰掛けた。

俺の目の前で大きな胸が少し揺れ、女性特有の甘い香りがふわりとする。フローラと使っている香水が違うのか、少し大人な香りだ。

隣に座るだけでも、スタイルの良い身体がお尻のあたりで密着するわけ。

俺はつい、ステラを眺めてしまう。大きな胸が存在感を強調している。スカートの下の黒タイツからわかる脚の形も理想的だ。

「何をジロジロと見ているのですか……？」

ステラは凍れるような声で言う。しまった。つい凝視してしまった。

俺は曖昧な笑みを浮かべる。

「いや、ついね。ステラさんが美人だなと思って」

日本でこんなことを言えばセクハラ発言になりかねないが、俺はオルレ안의皇帝なので許されてしまう。なんなら数少ない男で最高権力者なので、喜ぶ女性すらいる。

だが、ステラは不機嫌そうに俺を睨んだ。

「名前でお呼びいただくのは畏れ多いですから、シャンパーニュ公爵とお呼びください」

「俺は『ステラさん』と呼ぶほうが気楽で良いんだけど」

「陛下がそうしたいというのなら私には逆らえません。ですが、私に無用な親愛の情を抱いているのであれば、おやめください。私はあくまで臣下なのですから」

あくまでステラの態度はそつかなかった。

やむを得ない。相手はシャンパーニュ公爵という大貴族の家でもある。

俺は名前呼びを諦めた。

「ところで、わざわざこつそりこの部屋に来たのは、シルウィアさんとルナさんの対策は俺とシャンパーニュ公爵で進めるからなんだよね。知っていると思うけれど」

「皇后陛下のご命令ですから」

「そう。シルウィアさんたちの名前を出すどこでバレるかわからないから、インペラトル計画、という計画名にしよう。シルウィアさんたちのことは『お姫様方』と呼ぶ。これもフロラの言っていたことだけだね」

シルウィアたちへの対策は急務だった。外国勢力、それに貴族たちと手を組み、反抗されると内乱になりかねない。

俺は、にこりと笑う。

「早速だけど、お姫様方に納得して俺の妃お姫様になつてもらうためには、どうしたらいいだろうね？」

「陛下がそれにふさわしい方になるのが一番では？」

冷たい回答が返ってくる。

ある意味、正論なのだが、それでは困る。

「まあ、俺に足りないところがあるのは認めるけどね。でも、お姫様方は俺が完璧な人物だったとしても、新しい皇帝の妻となることを受け入れるかな？」

そもそもシルウィアたちは、血筋で劣るフロラの下立場になるのが気に入らないのだろ

う。俺と結婚すれば、彼女たちは皇后フロラの下身分、つまり側室となる。

そうである以上、彼女たちが納得するとは考えづらい。

「たとえば、彼女たち自身が皇帝を連れてくれば、違うのだろうけれどね。そうすれば、ルナは皇后、シルウィアは皇太后にして皇后の母となるわけで」

たとえば隣国のブルタレンス公国は遠い昔、オルレアン帝室から分家した家だ。

その公子を担ぎ出し、ルナと結婚させるという手もある。

俺の言葉に、ステラは首を横に振った。

「それは大逆という罪です。すべてのオルレアン帝国の女性は、皇帝陛下にご奉仕する義務があります。また、それが喜びでもあります。そのことをお姫様方にはわかっていただかないと」

「それは、どんな女性でも例外はない？」

ステラはためらうことなく、「そのとおりです」とうなずいた。

これは建前たてまえだな。

しかし、なるほど……。

俺はステラの胸をじつと凝視した。ステラは「な、なんです？」と言い、胸を手で隠す。

だが、俺はその手をどけ、右手でステラの胸に触れる。ステラが「ひっ」と悲鳴を上げる。

「へ、陛下!? 何をしているのですか？」

「すべての女性が俺に奉仕すべき」とシャンパーニュ公爵は言ったよね。それなら、君も例外

じゃないんじゃない？」

「わ、私は大臣です！ 帝国に貢献することが仕事で、夜伽よげをするなどありません！ あつ、ダメえええっ」

俺はステラの胸をまさぐる。形も良いし、大きな胸だ。さすが二十六歳。ユノほどではないにしても、アイリスより大きいだろう。

ステラは青ざめた様子だった。俺の手の動きに合わせて、彼女の柔らかな乳房も形を変える。もみもみと揉みしだくと、ステラは「いやあああつ」と叫ぶ。

左手ではステラのスカートの真ん中、下腹部をさわさわと触る。

「陛下といえども、公爵である私を手籠めにするなど許されることでは……んんっ、ああああああつ」

俺の指先がステラの乳首を探り当て、軽く指先で撫でる。

それだけで、ステラはびくんと身体を跳ねさせ、「ああああああつ!?」とはしたない声を上げる。

いつのまにか頬も紅潮していて、息遣いも荒い。

ステラは俺を睨んだ。

「何か変な薬を盛りましたね」

「さすがよく気づいたね。でも、変な薬ではなくて、女の子が気持ち良くなるだけの薬だよ」

「それを娯薬というのです！ んんっ。あつ……」

俺がスカートをめくると、下着が露わになる。意外にも可愛いピンク色の下着だ。

ステラは、かああつと顔を赤くする。

「こ、こんなこと、皇后陛下もてあそ下がお許しになるわけありません……！ あうっ」

胸を玩具のように弄もてあそはれながら、ステラは抗議する。

普通なら、さすがの俺も、こんなふうにいきなり女性を襲つたりはしない。

これには事情があるのだ。

俺は悪役のように、にやりと笑う。

「シルウィアやルナだっけ？ 彼女たちも同じように部屋に上がり込んで抱いてあげれば問題解決だよ？ 明日にでも行ってみようか」

「あのお方たちは、あなたなんかけに汚けされていい人じゃない！ あうっ、ああああああつ!?」

本音が出たな。

ステラは俺から逃れようと何度かまがく。そのたびに俺に俺に押さえ込まれる。

男の俺の力には敵わないのだ。

俺はステラを長椅子に押し倒すと、その左右の乳房を両手で揉みしだいた。

「いやあああああつ、助けて、誰かああああああつ、あうっ」

俺は彼女の上着のボタンを外そうとする。だが、そこでステラは全力で抵抗した。俺はわざと力を緩める。途端にステラは跳ね起きて、乱れた衣服のまま、部屋の外へと逃れていった。

俺はあえて追いかけない。これは政治上、必要なことだった。まあ、途中からは完全にステラを弄ぶことが目的化していたけれど……。

俺は物陰の方を振り向く。

「もう隠れていなくていいですよ」

俺の言葉を聞いて、カーテンの中から黒いドレス姿の女性が登場した。俺の協力者で、この後宮を最も自由に出入りできる人だ。

長身でスタイル抜群の大人の女性。ステラよりも胸も尻も大きくて、そして美しい。ユノ・オルレアン、つまりフローラの母は、ふふつと笑った。

「カズキさんも意外と鬼畜ですよ」

「あ、あれは演技ですよ」

「半分は本気でステラちゃんと子作りしようとしてたんじゃありません？」

「否定はできませんけど」

ちなみにステラはユノより三歳年下で、昔からの顔見知りらしい。もともと特段仲が良いわけではない。

「シャンパーニュ公爵はシルウィアに近い立場を取っていましたからね」

先代のシャンパーニュ公爵、つまりステラの父は皇后シルウィアを支持する立場だったらしい。だから、そのライバルのユノとは良くて疎遠、悪くて敵になる。

その因縁は帝室がフローラ、シャンパーニュ公爵家がステラの代になっても影を落としてい

る。

もともと、ステラはシルウィア派なのだ。なのに、ステラはシルウィアたちと俺との結婚を推進した。

ステラは裏切り者だという密告もあった。いろいろ探ると、やはりシルウィア派とつながっているらしい。

だから、フローラは俺にステラの本心を見極め、必要なら排除するように求めたわけで。

そこで俺はステラに迫ってその様子を見ることにしたのだ。

とりあえず、彼女はやはり本心では俺にシルウィアたちが抱かれるのに反対だとわかった。

表向き、女性はずべて俺に奉仕すべきと言っても、「シルウィアたちが俺に犯されるべきではない」とステラははつきりと表明した。

「それに加えて、もう一つ、ステラは許されざる罪を犯しています」

俺が言うと、ユノは「うんうん」とうなずく。

「カズキさんとの子作りを拒むなんて、いけない子ですよ」

俺はずっこけそうになった。

「いや、それではなく……」

「私だったら大歓迎なのにな」

そう言つて、ユノは俺に近寄ると、俺をハグして、その豊満な身体を押し付けた。

乳房も下腹部も俺に密着させ、ユノは赤い顔で俺を上目遣いに見る。

「ちょ、ちょっと待ってください。今はいやついている場合じゃないです……」

「そう言っつて、カズキさんもここを大^おつきくしているくせに」

ステラを弄んだものの、最後までできなかったせいで俺のものはかなり我慢させられている。加えて、こんなふうにユノに迫られたら押し倒しかねない。

ちなみにユノのことも、こっそり俺は抱いてしまっている。いつかはフローラに言わないといけない。

ユノは俺の前に正座すると、俺のズボンを剥^はぎ、ペニスを露出させる。

そして、自分のドレスの胸元をはだけた。フローラたちよりも圧倒的に大きな乳房がぶるんと揺れ、俺の目の前に露わになる。その乳首は興奮したようにピンと立っていた。

そのままユノは俺の肉棒を胸で挟む。

「ゆ、ユノさん!? 何をしてるんですか!？」

「もうっ。呼び捨てしてくださいって言いましたよね？」

「いや、そういう話じゃなく……あつ」

ユノは俺のペニスを胸で刺激していく。暴力的なほど大きな乳房が俺のものを優しく包みこんでいた。

その光景だけで、俺は射精しそうになる。ユノも興奮しているのか、さらに顔を赤くしている。

「ふふつ、若い子には真似できないテクニクでしょう？」



「いや、ユノはまだ二十九歳だから十分若いというか……」

「あら、嬉しいことをおっしゃいますね。ちゅぶつ……んっ、れろっ」

半裸のユノは乳房で肉棒を刺激しながら、舌も這わせる。俺のものが怒張し、いよいよ危なくなってきた。

俺はなんとかユノを押し留めようとする。

「ともかく、目論見通り、ステラは出て行ってくれたから、この部屋を調査しないと……」

もともと、それが俺の狙いだった。ステラはある罪を犯した。その反逆の証拠。

それがこの部屋にある可能性が高い。

「それが目的でステラちゃんを無理やり追い出したんですものね。でも、ちよつと回り道しても平気ですよ。入り口は護衛が見張っていてくれますし」

「そうかもしれないけど……あつ」

「だいたい、カズキさんが最近あまり私を抱いてくださらないのがいけないのです。だから、こうして……ひやうっ♡」

俺のペニスがどくんと跳ねる。そして、びゆるびゆるつと白い子種を放った。ユノの顔と乳房を精液が汚す。ユノは「んんっ♡」と嬉しそうな嬌声を上げながら、白濁を浴びていた。

「白いの……いっぱいですね♡」

ユノは白い欲望の跡で汚されたことで、かえって妖艶で美しく見えた。

「いかがでしたか？」

俺はため息をつく。そしてユノの乳房を揉みしだいた。ユノは「あうっ♡」と甘えるような声を上げる。

「気持ち良かったよ。ここが寝室ならもつと気持ち良かったと思うけど」

「なら、次は寝室でご奉仕しますね」

「今夜、抱くから。今は仕事をしよう」

ユノは、ふふつと微笑み、俺の精液を指先ですくって舐める。

「そうですね。ステラちゃんを許すわけにはいきませんから。もし私の大事な娘を『呪った』のなら」

☆

帝都には大小の貴族屋敷が立ち並び、大通りは商業地区として賑わっている。

戦争のせいで荒廃し、男の人口が大幅減少しているとはいえ、帝都が帝国最大の大都会には違いない。

もちろん、日本の東京と比べれば規模は小さいが、中世や近世の街としてはかなり規模も大きい。

その中でも七大貴族と言われる七つの大貴族家の屋敷は特に目立つ。

彼ら彼女らは地方に領地を持っているが、家臣に領地の支配を任せて、帝都にいても多

い。

だからその邸宅は巨大なものとなる。

シャンパーニュ公爵家の屋敷も例外じゃない。

その屋敷を、帝国軍近衛師団の女兵士たちが包囲していた。

シャンパーニュ公爵家に謀反の疑いあり、として。彼女は俺とフローラを廃位して、皇女ルナを帝国後継者として擁立しようとしていた。

陣頭に俺が立っているのはパフォーマンズの意味が強い。俺を帝国の支配者だと知らしめるということだ。

護衛の女兵士ユリアも一緒だ。茶髪の気の強そうな美人で十七歳。

彼女はもともとフローラが俺につけた護衛だった。護衛に専念するため、また彼女の母が敵兵に凌辱されて生まれたという経緯もあり、俺に抱かれることを最初は拒んでいたのだけれど……。

今では俺の愛人も兼ねている。護衛だからいつも身近にいるし、気が向いたら押し倒して子作りをしているし、彼女もそれを口では「仕事中はおやめください♡」と言いながらも喜んでいる。

そしてもう一人、重要人物がいる。実際の兵の指揮を執るのは、帝国軍の女性中將マリー・タレイラン。

マリーは二十代後半の女性で、彼女も七大貴族の次女だった。

門の前に集結した兵士に囲まれ、俺とユリア、マリーが並んでいる。

マリーは、にこにことしていた。金色のロングヘアをたなびかせ青い瞳は意思の力で輝いている。

軍服が似合う美女であるとともに、軍人らしい引き締まった身体をしている。

ただ、雰囲気は親しみやすそうで、実際、兵士からの人望も厚いらしい。

ちらつと俺はマリーの身体を見る。美人だし安産体型だし、子作りして孕ませたいけど……：単純には手を出せなさそうだ。

彼女を失うのは政治的にもまずい。

彼女はフローラ派で、俺にも忠実だった。

マリーはおどけて俺に言う。

「突入して皆殺し、というご命令ではないでしょうね？」

「まさか。俺がそんなに残酷に見える？」

「帝国の司法は秋霜烈日^{しゅうそうれつじつ}。先代皇帝陛下なら、反逆者とその係累をすべて肅清するぐらいの峻

厳さがありましたよ」

マリーは俺を試すように言う。なるほど。

先代皇帝と比較されているわけか。

俺は首を横に振る。

処理方針はフローラたちと相談済みであり、もちろんマリーも知っているはずだ。

「まずはステラ・シャンパーニュを逮捕。明確な協力者はあわせて処罰。無関係な家臣は罪に問わない」

俺は淡々と告げた。無関係な人間まで巻き添えにする必要はない。

満足そうにマリーはうなずいた。

そうしているうちに、ステラ・シャンパーニュが門の手前まで出てきた。周りを護衛で固めてはいるが、声も届くほどの距離だ。

昨日とは違って、女性らしいドレス姿だ。昨日俺に襲われたのに、胸元が開いた大胆なドレスなのは意外だ。

純白なのは潔白を訴えるためだろうか。

ステラは焦った様子で言う。

「なぜ皇帝陛下がこのようなことをされるのかわかりません。私とシャンパーニュ公爵家は帝国の忠臣で……」

「白々しい演技はしなくていいよ」

俺はびしやりと撥ねつける。門の向こう側のステラは、びくつと震えた。

「ステラ・シャンパーニュが皇女ルナを擁立し、謀反しようとしたこと。そして俺の妻フロラに呪いをかけて、子供ができないようにした明白な証拠は上がっている」

ユノが妊娠しないように避妊魔法を使ったが、それは少し違った形で他人にも使えるわけだ。リディアにかけられた不妊の呪いとも共通する。ただし、リディアにかけられたほど強力で

永続的なものではない。ステラが魔法を使うのをやめれば、効果も止まる。

ステラ・シャンパーニュはフロラの妊娠を妨害し、シルウィアの娘ルナとその配偶者を帝国の支配者にしようとした。

そういう陰謀の計画書が宮内大臣の執務室を搜索したところ、出てきたのだ。最終的には俺とフロラも殺害するつもりだったということもわかった。

言い逃れできないと悟ったのか、ステラは絶望の表情で黙ってしまう。

俺は声を張り上げた。

「このまま抵抗して反逆者として捕らえられるか、罪を認めて自ら縄につくか、どちらがいい？」

俺の問いに、優柔不断にもステラは答えられないようだった。

先に答えを出したのは彼女の家臣たちだった。

ステラを護衛していた女兵士たちは互いに目を合わせると、ステラを拘束した。

ステラはうろたえて、「な、何をする!？」と叫ぶが、もう遅い。

彼女の敗北が決定した瞬間だった。

もともと家臣からの人望も厚くなかったのだろう。ステラは当て身を食らわされ、気絶させられる。

女兵士たちはそのステラを抱きかかえ、門の外に出てくる。

「こ、これで私たちの命は助けていただけますでしょうか？」

「もちろん」

俺がうなずくと、女兵士たちはほっとした様子だった。

彼女たちは全員、十代〜二十代ぐらいで、けっこうな美人揃いだっただ。ステラが見栄えを重視して、護衛を選んでいたのかもしれない。

胸も大きい子が多いし……。

俺がつい性的な目で彼女たちを見てしまうと、ユリアがジト目で俺を見ていた。

「美人の女兵士枠は私一人で十分だと思いますけど」

「もしかしてヤキモチ？」

彼女も最初は俺に抱かれることを拒絶していたのに、変われば変わるものだ。

ユリアは頬を赤くして、「嫉妬とかではなくてですね……」と小声で言い訳しようとする。

ところが、ステラの護衛だった女兵士の一人が、そんな俺たちを見て、おずおずと申し出る。

「あの……もしよろしければ皇帝陛下の夜伽にお呼びいただければと思います」

その言葉をきっかけに、女兵士たちが「わ、私も!」「あたしも呼んでください!」ときやあきやあと叫ぶ。

彼女たちからしてみれば、ステラに連座して罪人になるなんてまっぴらごめんなのだらう。

仮にそうならなくても、ステラが公爵の地位を失えば、彼女たちも失業しかねない。

加えて、男が少ない国で、しかも俺は皇帝。玉の輿のチャンスと考えてもおかしくない。

その中でもとりわけ美人で妖艶な雰囲気娘の俺に俺は目をつける。二十歳になつていないぐら

いだと思う。

黒色の長い髪に青い瞳。兵士の簡素な服装だからこそ身体のラインがはつきりわかつて、その胸の大きさもわかる。

彼女は俺の視線に気づいたのか、ふふつと笑う。

俺はその娘に近づくと、胸を軽く撫でた。きやつ、と彼女は小さな悲鳴を上げる。

「あつ……陛下……いけません」

「君、名前と年齢は?」

「ナタリーといいます。十八歳です。あつ、そんなところダメですつ……んっ♡」

俺がナタリーの下半身に右手を突っ込み、秘所を指でかき回す。彼女は赤い顔で身悶えした。左手では大きな乳房を服の上から弄ぶ。うん、最高だ……。

とはいえ、そうも言っていられない。將軍のマリーは面白そうに、護衛のユリアは冷ややかに俺のことを見つめているからだ。

ユリアは俺とナタリーを引き離そうとする。

「ちゃんと仕事してください。こ、子作りなら、後でいくらでも私が相手をお願いしますから」

「それは嬉しいね。ありがとう。じゃあ、今夜、ナタリーと一緒に奉仕してもらおうかな」

「な、なんでそうなるんですか!」

ユリアの抗議は無視したが、俺はナタリーを解放する。ナタリーは着衣が乱れ、息を上気させている。

俺は美人兵士のあられもない姿に視線が釘付けになる。彼女はくすりと笑うと、「ぜひ可愛がつてくださいね」なんて可愛らしいことを言う。

俺はもう一度、ナタリーの胸を撫でると、「きやつ」と彼女は可愛らしい悲鳴を上げた。

さて、ユリアの言う通り、仕事をしないとイケない。マリールたち貴族を納得させるためにもステラは気を失い、女兵士たちに拘束されている。その彼女の身柄を俺は受け取ると、そのまま抱き上げた。

華奢な身体だから、想像通り軽い。あのプライドの高そうな美女が、今では俺のなすままだ。

「ナタリー、寝室はどっちだっけ？」

「ご案内します」

ナタリーが先導し、俺、マリール、ユリアと続く。もちろん、俺に抱きかかえられたステラもいる。

やがてステラの寝室だという豪勢な部屋に着いた。

ユリアは不思議そうに小首をかしげる。

「監獄に連れて行くのではないのですか？」

帝都には聖アントワーヌ監獄という巨大な監獄がある。そこに罪人は収容される。

大貴族のステラも例外じゃない。彼女は大逆罪を犯したから、帝国の法では本来なら死刑だ。一度監獄に入れられ、裁判の後に処刑される。

俺の妻のフロラに危害を加えようとした。許せることじゃない。

ただし、殺してしまうのは後味が悪い。一応それでも元日本人なので、その感覚からすると未遂なのに処刑はやりすぎだ。

そこで、フロラや首席大臣のアメリカたちと相談して、一つの方法を考えた。

屋敷はすでに帝国軍によつて占拠されている。

ステラの妹エトワールら、シャンパーニュ公爵家の親族も身柄拘束済み。

そうであれば、最後にステラを屈服させれば良い。

俺は寝室に入ると、天蓋付きの豪華なベッドの上にステラの身体を仰向けに置いた。

改めて見ても、男好きのする身体をしていると思う。抜群のスタイルに端正な顔立ち。透き通るような白い肌。

純白のドレスの胸元は、その大きな乳房を強調し、スカートのスリットからのぞく白いほっそりとした脚は、俺を誘うようだった。

「う、ううん……」

ステラがうめき声とともに目を覚まし、ベッドの上で身体を起こす。そして、周りを取り囲む俺、マリール、ユリアを見て、怯えた様子で後退りする。

「わ、私をどうするつもり？」

「本来なら、拷問の後、処刑だろうね」

「ひつ……や、やだ、死にたくない……!」

涙目でステラは言う。あの有能そうな大臣の面影もない。

俺は肩をすくめた。

「とはいえ、恩情はあるよ。まずは罪を認めること」

ステラはあつさりとフローラ陛下に危害を加えようとし、シルウィアとルナの擁立を図ったことを認めた。

それだけで許すわけにはいかない。

「もう一つ。シャンパーニュ公爵家の当主の座は君の妹、エトワールに譲ること。その上で、エトワールを俺の側室とする」

これはシャンパーニュ公爵の地位を帝室のものにすることを意味する。七大貴族たち大貴族の力を削ぎ、皇帝・皇后による中央集権化を目指す。

それは先代皇帝以来の課題だった。もちろん、今はそばで俺たちを守ってくれるマリー・タレイルンたちも、いずれは併合の対象になるだろう。

今回はシャンパーニュ公爵家が墓穴を自ら掘ってくれた。

俺の出した条件にステラはためらいなくうなずいた。妹の身がどうなっても気にはしないらしい。

「それより私自身はどうなるのでしょうか？」

「それが最後の条件だ。ステラ・シャンパーニュは死罪から罪一等を減じて、罪人として奴隷の身分に堕ちてもらう。一生を牢の中で過ごすことになるだろうね」

「そ、そんな……」

「もちろん、ただの奴隷じゃないよ」

「えっ？ きゃ、きゃあああああつ」

俺はステラを抱き寄せると、その胸をドレスの上から揉みしだく。

ステラは俺を押し返そうとするが、女の力では無理だ。

「や、やめてください……きゃつ、あつ……」

「そんなこと言える立場かな。これからはシャンパーニュ公爵ではなくて、ステラは俺の女として生きるんだよ」

俺はあえて名前を呼んでみる。ステラは呆然とした表情になり、それから俺を睨む。

「卑怯者！」

「そもそもこの国の法律では皇帝・皇后に危害を加える反逆罪は、死刑になる定めだ。恩赦するにも理由がいる。一番安直なのは皇帝の子を孕むことだね」

これはフローラやアメリカ大臣たちにも言われたことで、理由なくステラを許すわけにはいかない。ただ、子供を孕んでいる、それも皇帝の子ともなれば、逆に殺すわけにはいかない。

確実に助命できる。

つまり、ステラを俺が孕ませる。それは、彼女が助かる唯一の方法なのだ。フローラの承認も得ている。

「嫌なら別にいいよ。謀反人として処刑されるか、自害するか。選ぶといい」

俺が言うのと、ステラはポロポロと涙をこぼし始めた。

少し可哀想な気もするが、仕方ない。ステラはフローラに不妊の呪いをかけ、しかも最終的には俺たちを廃位し、たぶん殺害しようとするしていた。

厳格に対処する必要がある。理由もなく命を助けたとあつては。今後また同様の反逆者が命までは奪われないと俺たちのことを見くびるだろう。

そうならないためには、殺さないまでも奴隷ぐらいにはなつてもらわないといけない。

俺はステラのドレスの胸元を引きちぎり、ピンク色の下着を剥いだ。大きな乳房が揺れて露わになる。桜色の乳首がピンと立っていた。

ステラがうろたえたように、「あつ」と小さく悲鳴を上げた。

「もともと、俺に抱かれるつもりでそんな大胆な服を着てきたんじゃないの？」

「そ、そんなことは……」

ステラの声が小さくなる。潔白だと証明することと同時に、俺に命乞いをするためには、そういう露出度の高い服を着たほうが有利だとステラは思っていたのではないだろうか。

命の代わりに身体を差し出す、とまで具体的には考えていなかったにしても、無意識に身を守ろうとしたのだろう。

俺がステラの乳首をきゅつとつまむと、ステラは「ああ♡」と甘いあえぎ声を上げた。

「わ、私に妾になれというのですか？」

「妾？ まさか」

「そ、側室にしてくださいるのですか？」

期待をこめた目でステラが俺を見つめる。

貴族で魔力量が多い娘は側室、平民で魔力量が乏しい女は妾。身分差で俺の妻は分けられている。皇女のエリカは側室で、俺の寵愛するアイリスは妾だ。

だが、ステラは罪人だ。側室どころか妾になる気ではないのすら、おこがましい。

「言つたよね。ステラは俺の奴隷……側室や妾よりも下の立場、性奴隷だ」

俺に言われて、ステラは「そ、そんな……！」と悲痛な声を上げる。

「さて、どうする？ 俺の性奴隷になるか、それとも反逆者として死ぬか？」

ステラは何も言わずに泣いていたが、俺が秘所をドレスの上からまさぐると、「あつ……」と声を上げた。

「……なります！ へ、陛下の性奴隷になります！」

「もつと心をこめて言ってくれないかな？」

「わ、私のおま○こに、カズキ陛下のペニスを挿れて孕ませてくださいっ」

背後で俺たちを見ているマリイが「うわあ、陛下も鬼畜ですね」と面白がるように言い、ユリアは「陛下のエッチ……」とつぶやいている。

俺はうなずくと、ステラに小瓶を渡した。ピンク色の液体が入っている。

「こ、これは……」

「昨日、飲ませた媚薬の濃度を高めたものだ。フローラが用意してくれたものでね」